

文芸資料研究所蔵「草紙合高評双六」さうしあはせあたりすじろく 解題

佐藤 悟

草紙合高評双六はその名の通り、この当時評判になったと思われる合巻を題材とした双六である。改印が「卯九」「改」とあることから、改を受けたのは安政二年九月であり、安政三年の正月を当て込んだものであることが知られる。構成は梅素玄魚、画工は三世歌川豊国、板元は芝神明前の若狭屋与市である。大きさは大判六枚継ぎで、竪七二・六種、横七三・五種である。実践女子大学文芸資料研究所蔵のものは袋を欠く。内容は道中双六様式ではなく、出たサイコロの目によって進む駒の位置が指定される飛び双六とよばれるものである。内容は合巻の登場人物がそれぞれ横三コマに描かれ、一つの場面を構成している。その場面はそれぞれの合巻に描かれた場面をそのまま、あるいは合成したものである。ふりだしは下段中央に大きく描かれ、そこには合巻を比べる女性達が描かれている。そしてそこには次のような彼女たちの会話が記されている。

「そりやアなんのしんばんだエ」

「これハ質庫しちくらといふしんさくものでございますがおもしろうございますハそしてことしからつゞいてでますとサ」

「それもおもしろふござりますが時代かゞみがおもしろくなりましたヨ」

「オヤ／＼こんなところがありますヨ」

「さやうサはやくあとがでるトようござりますねへ」

ここでいう「質庫」は安政三年に若狭屋与市から初編が刊行される『雑談兩夜質庫』、「時代かゞみ」は前年に刊行がはじまったやはり若狭屋刊の『北雪美談時代加賀見』を指し、共に二世為永春水の作品である。

最上段の上りには大将鬻の貴公子が描かれ、その前にはカルタを取り合う女性達が描かれる。大将鬻は柳亭種彦の合巻『修紫田舎源氏』（文政十二年—天保十三年）の主人公足利光氏の鬻として描かれたのが最初である。『修紫田舎源氏』は天保改革で絶板処分とはなるものの、その様式は多くの合巻に継承され、光氏まがいの登場人物を輩出し、浮世絵にも「源氏絵」とよばれるジャンルを生み出している。

次にこの双六に描かれた合巻を略述（最上段右から始まり、左へ、そして下への順で記述）する。ほとんどが長編合巻であるので、作者・画工・板元等の変化があるが、全編数と安政三年に最も近い編の作者、画工、板元を記す。

○『児雷也豪傑譚』全四十三編。安政三年に第二十九編が刊行され、作者は柳下亭種員、画工は歌川国盛、ただし外題の画工は歌川豊国、板元は和泉屋市兵衛である。

○『釈迦八相倭文庫』全五十八編。安政三年に第三十四・三十五・三十六編が刊行され、作者は万亭応賀、画工は二世歌川国貞、ただし外題は歌川豊国、板元は上州屋重蔵である。

○『童謠妙々車』全二十五編。安政三年に第三編が刊行され、作者は柳下亭種員、画工は歌川国貞、ただし外題と口絵は歌川豊国が担当、板元は葛屋吉蔵である。

○『白縫譚』全七十一編。安政三年に第二十一・二十二編が刊行され、作者は柳下亭種員、画工は歌川国貞、ただし外題

の画工は歌川豊国である。板元は第二十一編が藤岡屋慶治(次とも)郎と柳下亭の合梓、第二十二編は柳下亭の単独板である。

○『弓張月春宵栄』全二十四編。安政二年に第十三・十四編が刊行され、作者は楽亭西馬、画工は歌川国輝、ただし外題は歌川豊国、板元は恵比寿屋庄七である。この編あたりの刊年には問題があるが、一応表記に従う。

○『牡丹園娘莊子』全五編。安政二年に第三・四編が刊行され、作者は笠亭仙果、画工は歌川国輝、ただし外題は歌川豊国、板元は藤岡屋慶次郎である。

○『与話情浮名横櫛』全六編。安政二年に第五・六編が刊行され、作者は榎田舍好文、画工は歌川国芳、板元は山本平吉である。嘉永六年三月に中村座で上演された瀬川如臯作の同名作の正本写である。

○『雑談雨夜質庫』全五編、安政三年に初編が刊行され、作者は為永春水、画工は歌川国郷、ただし外題と口絵は歌川豊国、板元は若狭屋与市である。

○『雪梅芳譚犬の草紙』全五十六編。安政三年に第三十六・三十七編が刊行され、作者は笠亭仙果、画工は歌川国貞、ただし外題は歌川豊国、板元は蔦屋吉蔵である。

○『琴声美人録』全十七編。安政二年に第十一・十二・十三編が刊行され、作者は山東京山、画工は歌川国輝(第十一・十二編)と歌川芳員(第十三編)であるが、第十二・十三編の外題を歌川豊国が描いている。板元は佐野屋喜兵衛である。

○『竹取物語』全十七編。安政元年に第十七編が刊行され、作者は山東京山、画工は歌川芳虎、板元は森屋治兵衛である。嘉永五年に刊行された第十五編の外題の画工は歌川豊国である。

○『遊仙杏春雨草紙』全二十編。安政三年に第十五編が刊行され、作者は緑亭川柳、画工は歌川国貞、ただし外題は歌川

豊国、板元は山口屋藤兵衛である。

○『南柯の夢優妓舞衣』全五編。安政三年に第五編が刊行され、作者は楽亭西馬、画工は歌川国芳、ただし外題は歌川豊国、板元は丸屋清次郎である。

これらのことから、『与話情浮名横櫛』以外は歌川豊国が何らかの形で関わった合巻が選ばれていることが判る。また合巻の作者としては柳下亭種員の地位が高かったことも知られる。

合巻の板元は双六の板元である若狭屋与市の刊行作品に限らず、この時期の主要な他の板元が刊行した合巻が多く含まれている。地本問屋の機能には出板以外に問屋機能があり、他の板元と本替によって入手した他の板元の合巻を自己の系列絵草紙屋へ卸していたことが知られているので、この双六は販売目録の意味も持っていたことが推測され、この双六が他の地本問屋の扱う商品となりえたことも理解される。ただ選ばれた作品の中には、なぜ選ばれたのか理由のはっきりしないものもあり、この双六がこの当時の合巻のランキングを必ずしも正確に示しているものではないということには留意しなければならない。いずれにせよ、この双六は幕末期における合巻享受のあり方を窺わせると同時に、合巻流通のあり方をも示す興味深い資料なのである。

本稿は文芸資料研究所設立二十周年の記念に作製される本双六の複製に添付する解説として執筆されたものです。その際には鈴木重三先生・高木元氏・上野英子氏から多大なご援助を賜りました。末尾ながら御礼申し上げます。